

主 文
原判決を破棄する。
被告人は無罪。
理 由

本件控訴の趣意は、弁護士木内茂作成名義の控訴趣意書記載のとおりであるから、これを引用し、これに対して当裁判所は次のとおり判断する。

控訴趣意第二について。

所論は、要するに、原判決が被告人に過失を認めたのは事実誤認であり、また、Aが本件事故により原判示のような傷害を受けたと認定したのも事実を誤認したものだといふのである。

そこで、検討してみるのに、司法警察員作成の昭和四三年六月二日付実況見分調書によれば、本件事故の発生した交差点は、東西に走る国道B号線の直線道路（以下「国道」という。）に北から南に向かう道路（以下「南北道路」という。）が神奈川県平塚市a b番地先において丁字形に交差する場所であつて、本件事故は、右の南北道路を北から走つてきたAの運転する自動車は国道を右折しようとして国道上に進出し、その先端が国道の車道北端の延長線から二・三メートル入つた地点まで出たところへ、国道上を西から東へ向かつて走つてきた被告人の自動車と衝突したことにより発生したものであることが認められる。そして、一件記録および当審における事実の取調べの結果によれば、被告人はA運転の自動車が国道上にスーッと出てきたのを二二・二メートル手前で発見すると同時に軽くフットブレーキを踏みクラクションを鳴らしながらやや右寄りに進行してAの車を避けようとしたが及ばず、ついに自車車体左側前部がAの運転する自動車の左前部と衝突するに至り、その結果Aが原判示傷害を負つたことが明らかであるが、右の交差点は、これに至るまでの国道北側に沿つて高さ一・五メートルくらいの竹さくがあり、交差点の手前の国道を進行する車両からは南北道路の存在が認識しにくい関係にあるうえに、Aの車が国道上に進出してきて停止したのと被告人がこれを発見したのとが同時であつたことが認められるから、被告人の不注意により発見が遅れたものとはいひ難く、また、発見後に被告人のとつた措置も、記録上明らかなように、当時雨が降つていて路面が濡れていたことと、対向車両のあつたことを考慮すれば、状況上やむをえなかつたものといふべきで、この段階においては被告人として本件衝突事故を避けることが可能であつたとはいひ難い（次に認定するような被告人の自動車の速度からすれば、急制動をかけてもAの車の手前に停止することは不可能であり、また当時の路面の状態よりして、急制動を施すことはかえつて危険であることは被告人の言うとおりでであると思われる。）。

これに対し、原判決は、右のような交差点を通過する被告人としては、事故を防止するため、あらかじめ自車の速度を制限時速六〇キロメートル以下に減速すべきであつたと判示しているのに、この点について考えて〈要旨〉みるのに、前記実況見分調書によれば、本件交差点は、交通整理が行なわれておらず、その南北道路に入る部〈要旨〉分の両角はやや円型になつてはいるけれども、国道の車道部分の幅員は一・二メートルであるのに対し、南北道路の幅員は車道の部分で七メートルであつて、前者のそれが明らかに広いといわなければならないから（最高裁判所昭和四四年（オ）第二八九号、同四五年一月二七日第三小法廷判決、裁判所時報第五四〇号一頁の事例参照）、国道を走行していた被告人としては、この交差点において徐行すなわち直ちに停止することができるような速度にまで減速すべき道路交通法上の義務はないと解すべきである（同上判決および同裁判所昭和四二年（ア）第二一一号同四三年七月一六日第三小法廷判決、刑集二二巻七号三一七頁等参照）。また、Aとしてみれば、本来本件交差点に入ろうとする場合には徐行しなければならない（道路交通法第三六条第二項）、かつ、交差点で右折する場合には直進車の進行を妨げてはならない（同法第三七条第一項）のであるから、同人が南北道路から出てきて国道の北側部分の直進車である被告人の運転する自動車の進路に自車の前部を前記のように出しすぎたのは明らかに交通法規に違反するもので、国道を走行していた被告人としては、Aの車のようにあえて交通法規に違反して左方道路から前記のように国道上深くまで進出してくる車両のありうることまで予想して自車の速度を減速すべき注意義務はないと解するのが相当である。すなわち、被告人としては、この場合法定の最高速度である時速六〇キロメートルで進行すれば足りたのであつて、原判示のようにそれに満たない速度にまで減速すべき義務はなかつたといわざるをえない。

ところが、本件において問題となるのは、被告人の車の当時の速度であつて、こ

(一) 掲記のような傷害を与えたことを事故発生当時知っていたと認め、不足の証拠はないので(なお、物件事故に関する報告義務違反は本件では訴因とされている。その点に関する報告義務違反については犯罪の証明がないことに帰着する。したがって、原判決が判示(二)のように事実を認定したのは事実を認めたもの

で、この誤認が判決に影響を及ぼすことは明らかであるから、この点でも原判決は破棄を免れない。

よつて刑事訴訟法第三九七条第一項、第三八〇条、第三八二条により原判決を破棄し、同法第四〇〇条但書を適用して被告事件につきさらに判決することとする。

本件公訴事実是要するに、

被告人Dは自動車運転の業務に従事するものであるが

(一) 昭和四三年四月二三日午後八時三〇分ごろ普通乗用自動車(品〇せ〇△×□号)を運転し、神奈川県平塚市a b番地先の交通整理の行われていない交差点を小田原方面から藤沢、東京方面に向かい通行するにあたり、同交差点は左方の見とおしが困難であり、かつ降雨中で制動の際滑走の虞れがあるから正常な制動操作が採れる程度に減速して進行すべき注意義務があるのに時速約七〇キロメートルで進行した過失により、左方道路から前記交差点に進入しようとしていたA(四〇年)運転の普通乗用貨物自動車を左前方約二二・二メートルの地点に認めたが間に合わず、同車に自車左前部を衝突させ、その衝撃によりAに加療約二ヶ月間を要するムチ打ち症の傷害を負わせ、

(二) また、右日時場所において、右のような交通事故をおこしたのに、その事故の発生日時場所等法令に定める事項を、直ちにもよりの警察署の警察官に報告しなかつたものである。

というのであるが、前記説示のとおり、(一)については被告人には過失がなく、(二)についてはその証明がないから、刑事訴訟法第三三六条により主文のとおり判決する。

(その余の判決理由は省略する。)

(裁判長判事 中野次雄 判事 山崎茂 判事 中村憲一郎)